

光明禪寺

第486号

令和五年三月

現在に活きる

仏の教え

高く飛ぶためには、一度身をかがめ、充電しなければならぬ。

一人の人間のアイデアを盗むのを盗作と言ひ、多くの人間のアイデアを盗むのを、研究と言ひ。

多くの人は、人間としての成長や心よ
りも、外見やイメージを大切にしてい
る。

大事なことは頭で考えるのではなく、
心で決めると言うことなんだ。

電話 1P 221 4127 (2回線)
4171 090 7981 9123
FAX 241 3519

(県・市文化財指定安置所)

〒八九一〇〇二 指宿市十町南迫田二七六八

三月の行事

一 暁天竺禅 初一日(曜)五日(朝六時)

初二日(曜)十二日

一 春のお彼岸法要(中日)

納骨堂 二十一日 一時

本堂・地藏尊・水子供養
戦死病歿者・先祖供養

二十一日 二時

(決算の為に 令和四年度分(護持会
費・年会費)未納の方はよろしくお願
いします。これは必要経費です。)

こころの修行

私たち人間は悩み多き存在です。ちっぽけなことに腹を立て、余計な心配をして自分で悩みのタネをつくる……それが私たちの日常でしょう。そうしたありようがラツとかわって、清々しく過ごすことが出来るはきき方。すなわち、仏さまのお悟りの世界に私たちは憧れを抱いてきました。仏さまは、私たちにとはとても午が届かないと思われ滔々たうたうと流れる大河の「向こう岸」におられるとされます。そのため、仏さまの世界を「彼岸（彼の岸）」と呼ぶのです。その「彼岸」に思いを寄せるのがお彼岸の一週間で、ご先祖さまのご供養やお寺のお詣りなどを通して、仏さまの

教えに触れ、仏さまの生き方を実践することは、大切な「こころの修行」なのです。でも、仏さまの世界は私には遠すぎて、修行しても意味があるように思えないけど……このように思われる方もおられることでしょう。しかしながらちよつと考えてみてくださ。困っている人がいるときに堪たまらうす声を掛けたことはありませんか？ 悲しい気持ちの人がいたらじつとそばに寄り添ったことはありませんか？ そのとき、私たちに菩提心ぼだいしん（仏さまのお悟りを求めるこころ）が生まれているのです。それは小さな菩提心かもしれませんが、たとえそうであっても、確かな第一歩に違ちがいありません。「彼岸」は遠くて近いところにあるのです。

「このころの修行」を通して、仏さま
とのお縁を深め、菩提心を培い
ておくお彼岸。それは、私たちと
ご先祖さまやここに想う亡き人
びとが、皆ともに安らぎの世界に満
たされる季節なのです。

・お彼岸の由来

お彼岸は、春分および秋分の日
を中日として、前後三日おつをあら
せた各七日間をいいます。季節の
変わり目にあたり、いのちの尊さ
や自然の恵みに感謝しながら、
先祖さまを供養し、ご加護を
願う行事として古くから行われ
てきました。各家ニ庭ではだんごや
ぼたもち、おはぎなどを仏壇に供
え、そつてお墓参りに出かける

光景が見られます。私たちにとつ
てたいへんなじみの深い、欠かすこと
のできない年中行事と言えらるでし
よう。彼岸とは、古いイントの言葉
で、修行の完成を表す「パーラミタ
」（波羅蜜）に由来します。仏教で
は、私たちが生きている迷いの世界を
「此岸（川のこちら側の岸）」と呼び、
おさほりやとらわれのないさとりの世
界を「彼岸（川の向こうの岸）」と呼ん
で、安らぎの彼岸へ渡ることを願
い、仏道修行が行われてきました。
そしてこの時期には特に、在家信者
も戒律を守り、仏法を聞き、生活
を正すという習慣がありました。
私たちは、日常の生活に追われ本
当に大切なことを見失ってしまいか
ちです。お彼岸は、今日ある自分

を育んでくれたご先祖さまに思いを
寄せると共に、自分自身のいのちの
在り方を見つめ直す、大切な期間
なのです。

・六波羅密
布施（ふせ）

限りない慈しみと
与える喜びを知る

持戒（じがい）

正しい生活をして自

忍辱（にんにく）

寛容な心を持ち

精進（しょうじん）

ものごとにあたる
怠ることなく一生

禅定（ぜんじょう）

懸念命努力する
心穏やかにして真

智慧（ちえ）

理を見極める
ものごとの真理を
正しく理解する。

・めざまめの珈琲

朝 めざまめの珈琲を飲む

このめざまめの珈琲は 二度ともどら
ない かけがえのない 今日のお弁当

昼 お弁当を食べる

このお弁当は 二度ともどらな
い かけがえのない 今日のお弁当

夜 お風呂に入る

この入浴は 二度ともどらな
い かけがえのない 今日の入浴

生きるとは

毎日の

二度ともどらな
い かけがえのない 繰り返しを

丁寧

心ふかく

いとなむこと